プラウド卒業生文庫

元会長中川赳氏がYNUプラウド卒業生に認定されました

井上　誠一（昭和 41 年応化卒）（公益財団法人横浜工業会理事長）

横浜応化会（国大化学会の前身同窓会の一つ）元会長の中川赳氏が第２回 YNU プラウド卒業生審査委員会において、他の候補者３名と共に YNU プラウド卒業生に認定されました。平井会長より、中川氏と比較的係わりの深かった私から紹介文を書くようにとのご依頼がありましたので、ここに中川氏の、特に大学や同窓会に対するご貢献を中心にご紹介します。

中川赳氏近影（1981年）

【中川赳氏経歴】

1911年	2月22日東京に出生
1931年	横浜高等工業学校（横浜国立大学工学部・理工学部の前身校）応用化学科卒業
1931年	明治製糖株式会社入社
1945年	明治製菓株式会社に異動
1946年～	ペニシリン、ストレプトマイシン、カナマイシン等の抗生物質の開発・製造・発売
1960年	取締役就任（薬品部長、川崎工場製薬部長）
1968年	専務取締役就任
1970年	代表取締役社長就任
1973年	藍綬褒章受賞（国民医療・保健衛生の向上）
1979年	大河内記念技術賞受賞（オリゼメートの開発等）
1981年	大河内記念技術賞受賞（ジベカシンの開発等） 勲三等旭日中綬章受章
1988年	代表取締役会長就任（～ 1991年3月）
1989年	勲二等瑞宝章受章 紺綬褒章受章（社会に奉仕した活動）
1991年	3月20日　逝去（80歳）

本題に入る前にYNU プラウド卒業生文庫について簡単にご説明します。この文庫は、横浜国立大学に入学した学生が将来のことについて考えるとき、諸先輩の足跡を通じて様々な示唆や教訓、刺激等を得て、生涯に亘る人生設計や自己実現ができる機会となることを期待して、平成25年度に設置されました。詳細は「設置趣旨」をご覧下さい。また、平成26年3月27日に開催された披露式については本誌第12号56頁に紹介されています。また、平成25年度に認定された第１回 YNU プラウド卒業生に関しては「横浜工業会だより」第26号に、平成26年度に認定された第２回 YNU プラウド卒業生に関しては「横浜工業会だより」第27号にそれぞれ紹介があります。

中川赳氏は横浜高等工業学校応用化学科を卒業し明治製糖㈱に入社、後に明治製菓㈱に移動され、抗生物質ペニシリンの製造開発に従事されました。ペニシリンの工業化を成功させた後、ストレプトマイシン、カナマイシン等の抗生物質医薬品を次々に立ち上げて、明治製菓株式会社を原料の混合・加熱・乾燥等の加工の菓子企業から，発酵・抽出・精製等の技術を駆使して、日本一流の医薬品企業に発展させました。

薬のくの字もないところから抗生物質に立ち向かった中川氏の原動力になったのは、学生時代当時の鈴木達治校長の“三無主義”の中にある、「自ら学び、自ら工夫し創造する自主独立の精神を養う」ことによることが大きいと語っています。これこそ現在のキャンパスにある碑に刻まれた「名教自然」の精神です。

このように菓子産業と医薬品産業の両立を成し遂げた功績は非常に大きく、昭和45年11月代表取締役社長に就任され、昭和63年６月会長に就任されるまで18年間製菓・製薬の陣頭指揮を執られたのは脅威に値します。

YNUプラウド卒業生文庫設置趣旨

国際化、情報化など社会が急速に変化している中で、横浜国立大学（以下「本学」という。）に入学した学生を取り巻く学習環境や生活環境も大きく変化しております。その中で将来進むべき道をどの様に考え、何を選択していくか、本学としても様々な側面から学生の学習や研究、生活、進路などを支援しています。

学生はこうした中で、既に卒業された諸先輩の講演を聞いたり、自分の専門外の分野に興味をもったり、友人の話に感化されたり、流動的な社会情勢に直面したりし、自己を見つめ直す機会も多くなっています。

「YNUプラウド卒業生文庫（以下「文庫」という。）は、将来のことについて考える学生について、諸先輩の足跡を通じて様々な示唆や教訓、刺激等を得て、生涯に亘る人生設計や自己実現ができる機会となることを期待して設置したものです。

文庫では、本学の卒業生で社会の各般で活躍されている方や多大な成果を上げられ既に物故者となられた方など、社会的貢献度の高い方々を紹介します。文庫で紹介します卒業生については、本学同窓会からの推薦協力を得て、本学の設置する委員会において決定しております。

本文庫が、世界をフィールドとして活躍する優れた人材の輩出に寄与するとともに、広く地域社会にも貢献できることを願っております。

平成26年３月27日

横浜国立大学長
鈴　木　邦　雄

また、社長として多忙な身でありながら専門の医薬品分野だけでなく菓子業界や財界活動等の役職に就き産業の発展に寄与しました。

その主なものを列挙すると、医薬品分野では：日本製薬団体連合会理事・日本製薬工業協会理事・日本ペニシリン協会理事・日本医薬品情報センター理事、菓子業界では：日本チョコレート・ココア協会会長・全国菓子協会常任理事・日本菓子協会会長、財界等では：日本経営者団体連盟常務理事・経済団体連合会理事・全国公正取引協議会副会長・食品特許協会会長・食品産業政策協議会委員・南西アジア経済調査団副団長・西アフリカ経済産業開発調査団副会長等々、枚挙に暇がありません。

中川氏は母校に対しても熱い眼差しを持ち続け、同窓会活動に熱心に取り組まれました。昭和45年に横浜応化会第３代会長に就任された時、私は会計担当の常任幹事を仰せつかり、中川氏の仕事ぶりを間近で拝見する機会に恵まれました。中川氏は昭和57年に会長を小山秋義氏に交替するまで４期12年に亘り会の発展に尽力されたのみならず、学科の垣根を超えた卒業生・同窓会の融和と交流に心を注がれました。昭和45年は工学部創立50周年の年であり、記念事業として祝賀会の開催、工学部50年史の編纂等の事業が成功したのは中川氏の貢献が大きいと思います。

また昭和48年には各科同窓会長の合意によって横浜国大工学部工学部連合同窓会が発足し、昭和53年に横浜国大工業会に改称されると会長に就任されました。この年は工学部が弘明寺から常盤台への移転を完了した年で、卒業生、企業、神奈川県、横浜市等が出捐者になってできた工学部施設拡充後援会が寄附した５階建の研究施設は取り壊されることになっていました。この建物を残し、卒業生・同窓会が利用できるようにするため、中川氏は大学と何回も意見交換し、卒業生の寄附による財団法人を設立することにより、その実現の道筋をつけました。昭和55年に、工学部創立60周年記念事業の一環として、㈶横浜工業会設立準備会が発足して募金が開始され、昭和56年３月に㈶横浜工業会設立が許可され、中川氏が初代理事長に就任しました。大学は昭和56年度の予算で外国人研究者等宿泊施設として改修し、昭和57年４月国際交流会館として開館しました。㈶横浜工業会の事務局も置かれ、会議室や食堂は同窓会や卒業生も利用できることになりました。

中川氏は平成２年３月まで理事長を務められましたが、その９年間の間に財団としての基礎固めが行われた結果、その後順調に発展して、理工学系の教育研究に対する支援事業は平成26年度で総額２億円を突破するまでになりました。大学と卒業生（同窓会）の双方にとって大きなプラスとなることを考え、“社会に役立つなら幸せ”という信念に基づいて力強く行動された結果です。

中川氏は横浜国大の発展に別の角度からも貢献されました。昭和62年に国立学校設置法施行規則が改正され、国立大学に民間からの寄附による寄附講座が設置できることになりました。翌年明治製菓㈱（中川社長）は申し出を行い、３億円の寄附により平成元年から３年間物質工学科に「機能分子設計講座」が設置されました。この寄附講座には客員教授として理化学研究所主任研究員の大石武薬学博士（後に明治薬科大学学長に就任）、客員助教授として理化学研究所研究員の大塚晏男薬学博士が就任されました。この寄附講座は素晴らしい研究成果を挙げると共に、優秀な大学院生を輩出し、大学の教育と研究の発展に寄与し、研究設備の充実にも大いに貢

献しました。

中川氏はリーダーとしていろいろな機会に原稿や講演で信条や経営方針を語っておられますが、それらは中川　赳遺稿集「一日生涯」にまとめられています。その中からいくつかを簡潔にご紹介します。

「一日生涯」の表紙カバー

・調和の精神

調和とは、個々の力が統一結集されて最も充実した姿である。相互理解の上に、互いの力を生かし合い、より大きなものを作り上げること、つまり集団が個人の力の総和以上に響き合う状態が理想である。企業と社会、経営と労働、人間と機械といった間にも広くこの精神を生かそう。

・「耐える」ことの訓練

今日の文明社会にあっては、「相手の立場に立って考える」「迷惑をかけない」「義務の伴った権利意識」が基本的条件である。長期的展望に立ち、しっかりと自らの方向を見定め、努力と忍耐と自己啓発を惜しまず、着実に前進されるよう期待する。

・現状の延長線上に解はない

変化は、古いものにしがみつこうとする者には、未曾有のピンチであるが、それを先取りする者には、またとないチャンスである。変化をチャンスとするためには、自己革新を恐れてならない。過去を振り返り、未来を展望して上で、過去と未来の接点である現在に何をなすべきかを考える。つまり過去—未来—現在という順序で考えるのが、これからの発想法である。